自然体で立つ嘉納治五郎
（取材協力　公益財団法人講道館）

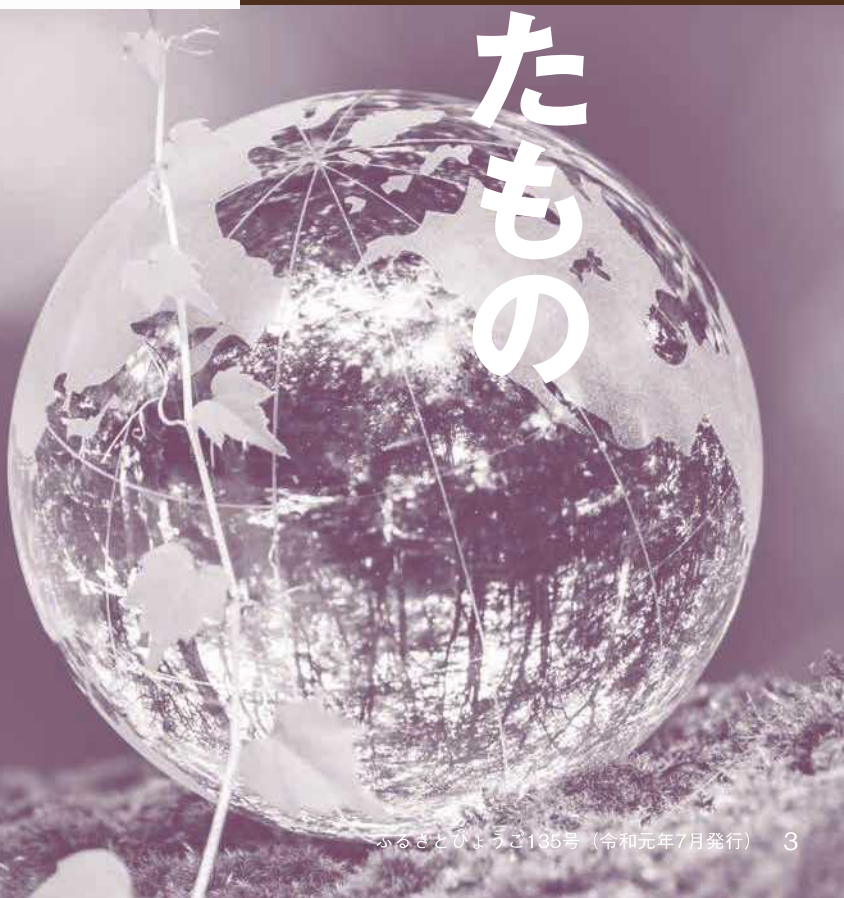
「柔道の父」嘉納治五郎がのこしたもの

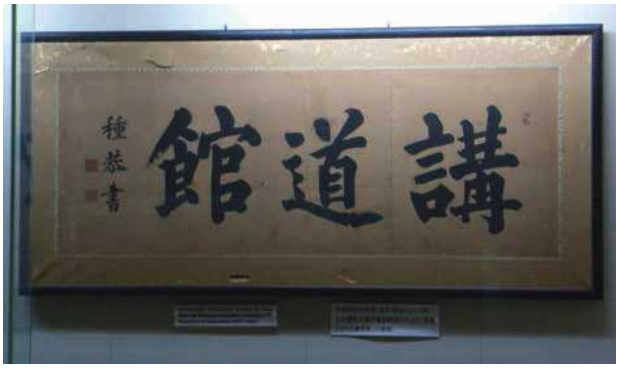
今に生きる教育者としての教え
御影が生んだ世界の偉人

東京五輪・パラリンピックの開幕まで1年と迫った。全世界の選手が集い、4年に一度だけ開かれるスポーツの祭典と日本のなれそめを語るとき、欠かせない人物がいる。神戸・御影出身で「講道館柔道」の創始者嘉納治五郎。アジア初の国際オリンピック委員会（IOC）の委員に就き、日本が初参加した1912年のストックホルム五輪で団長を務めた。「日本の体育の父」と言われるゆえんである。

功績はそればかりではない。教育者だった嘉納は、出身地の神戸に、今や進学校として名高い灘校の創設に尽力し、多くの人材を国内外に輩出している。

柔道を通して嘉納が提唱した理念に「精力善用」と「自他共栄」がある。力を最大限発揮し、助け合って自他ともに幸せになろう、との教えだ。個人同士ばかりか国家間の関係にもあてはまる精神は、さらに輝きを持って我々が進むべき針路を照らしている。（神戸新聞東京支社編集部長　東方利之）





学習院初代院長　立花種恭による「講道館」の扁額（取材協力　公益財団法人講道館）

嘉納治五郎は１８６０（万延元）年10月、摂津国菟原郡御影村浜東で産声を上げた。現在の神戸市東灘区御影本町１丁目で、浜に面した大邸宅であった。生家は菊正宗で知られる本嘉納家と縁戚関係にあり、造り酒屋や江戸に清酒を運ぶ廻船業を生業としていた。

時は幕末。大老井伊直弼が暗殺される桜田門外の変が起き、時代の転換期だった。父治郎作は軍艦奉行だった勝海舟の活動を資金面で支え、和田岬砲台などの建造に協力した。勝は幼かった治五郎に学問の重要性を説いたとされ、後に治五郎が東京に開いた道場「講道館」に贈った扁額が今も残されている。

明治維新が成り、新政府に仕えた父とともに10歳の治五郎は上京する。父の勧めもあり、治五郎は積極的に英語やドイツ語を学び、官立外国語学校などを経て東京帝国大学の前身である官立開成学校で政治学や理財学を修めた。その一方、体は決して大きくなく弱かったことにコンプレックスを感じていた治五郎は柔術道場へと通い、複数の流派の柔術を基に技などの研究を重ねて新しい「柔道」を作り上げていった。

嘉納治五郎が記した「精力善用」と「自他共栄」（取材協力　公益財団法人講道館）

講道館創設ごろの嘉納治五郎（取材協力　公益財団法人講道館）

文武両道に生きる 精力善用と自他共栄

１８８２（明治15）年５月、今や世界共通語となった「ＪＵＤＯ」の総本山とも言える道場「講道館」が、現在の東京都台東区東上野５丁目の永昌寺に開かれた。講道館はその後、南神保町や上二番町、富士見町、真砂町、下富坂などを転々とし、現在の文京区春日に至っている。永昌寺には「講道館柔道発祥之地」の碑が建つ。

幼い頃から学んだことを教えるのが好きだった治五郎は、教育者としても多くの足跡を残している。学習院の講師としてその第一歩を踏み出し、61歳で東京高等師範学校（現在の筑波大学）の校長を辞するまで後進となる教育者を育て続けた。

治五郎が熊本の第五高校校長だった時、柔道が世界に発信される。英語教師として赴任したラフカディオ・ハーン（小泉八雲）は１８９５（明治28）年、治五郎から手ほどきを受けた柔道を自著「Ｏｕｔ　ｏｆ　ｔｈｅ　Ｅａｓｔ」（東の国から）で紹介した。講道館の門下生たちも欧米で柔道を広めていった。

治五郎の名が海外でも知られようとしていた頃、ヨーロッパで１８９６年、第１回オリンピックがアテネで開催された。参加国は欧米が中心で、世界的な大会にしたいと考えていた近代五輪の祖クーベルタン男爵から治五郎にアジア初の国際オリンピック委員会（ＩＯＣ）委員就任の話が来た。母国フランスの敗戦からの復興を目指すクーベルタンは、スポーツを通じた教育の推進を進めており、世界平和のためにオリンピックの輪を広げたいとする考えに治五郎は委員就任を承諾した。１９１２（大正元）年、日本はオリンピックの第５回ストックホルム大会に初めて参加し、治五郎団長の下、東京高等師範学校の教え子だったマラソンの金栗四三ら２選手が歴史的な一歩を記した。

見果てぬ夢となった 東京五輪

「日本体育の父」として世界に踏み出した治五郎は、さらに第７回アントワープ大会、第９回アムステルダム大会、第10回ロサンゼルス大会、第11回ベルリン大会と続けてオリンピックに臨席した。世界を見て回り、大戦後の国内外の世情を憂う治五郎は１９２２（大正11）年、世の中に貢献するための道徳理念を説く「講道館文化会」を設立した。この時に発表された言葉が「精力善用」

と「自他共栄」だった。精力善用とは自分の持てる力を最大限に発揮しなさいという教えであり、自他共栄は互いに尊重しあって幸せになろうと諭している。

この思いを持って治五郎はオリンピックの東京招致に動く。目指すは1940（昭和15）年の第12回大会。1932（昭和7）年のロサンゼルス大会で名乗りを挙げ、翌年、翌々年とIOC総会でアジア初となる東京開催の国際的な意義を説いた。1936（昭和11）年のベルリン大会で流ちょうな英語で演説し、東京はヘルシンキとの決選投票の結果、招致を勝ち取った。

だが、間もなく日中戦争が始まり、交戦中の国での開催に批判的な国際世論が起きた。治五郎はスポーツと政治は別との思いから1938（昭和13）年、カイロのIOC総会で東京開催の確認を取り付けた。治五郎はさらにギリシャ、アメリカなどを訪問し、大会成功に向けて地ならしをして回ったが、帰国の途に就いた船上で肺炎となり、横浜港到着の2日前に帰らぬ人となった。享年79歳。オリンピック招致に情熱を注いだ晩年だった。

日中戦争が激しさを増す中、日本は治五郎の死から2カ月後、開催権を返上し、1940年東京大会は幻となった。さらに治五郎の思いと逆行するかのように日本は太平洋戦争へと突入し、敗戦。国際的信用を失った日本にとってオリンピック再誘致の道は閉ざされたかと思われたが、日本のスポーツの復興は早く、1952（昭和27）年のヘルシンキ大会に参加が認められると東京招致に乗り出した。そして1959（昭和34）年のIOC総会で1964（昭和39）年の東京開催が決まった。

この時、招致の演説をしたのが、船上で治五郎の最期をみとった元外交官の平沢和重だった。平沢は治五郎の代弁者であるかのように「西欧は日本をファーイーストと呼ぶが、ジェット機時代を迎えた今、ファーではない。国際間の人間同士のつながり、接触こそが平和の礎ではないか」と訴えた。そして東京大会で柔道が正式種目として採用された。

嘉納治五郎最期のパスポートスタンプ（取材協力　公益財団法人講道館）

（上）東京の永昌寺にある講道館柔道発祥地の記念碑（取材協力　公益財団法人講道館）
（下）講道館の柔道場で練習する子どもたち＝東京都文京区春日

文教地区・東灘の立役者に

小さくして故郷の神戸を離れた治五郎だが、地元とのつながりは続き、特に教育面での貢献は大きかった。

治五郎は自らの教育理念を実現するため、千葉県我孫子市に土地を取得し、学校創設を計画していた。だが、次第にIOC委員としての活動や1922（大正11）年に就いた貴族院議員の仕事に追われるなどして断念した。

ちょうどその頃、出身地の御影の有力者たちから私立の中学校創設に力を貸してほしいとの依頼が舞い込んだ。当時の一帯には大阪の財界人や商人らが邸宅を構え、子どもの教育に熱心だったが、中学校は不足していた。学校創設を諦めていた治五郎は快諾し、親戚筋に当たる菊正宗や白鶴、櫻正宗の酒造家に資金提供を掛け合った。

初代校長に東京師範学校の教え子でまな弟子の眞田範衛を迎え、1928（昭和3）年4月、神戸・東灘の魚崎の地に灘中学校（旧制）が開校した。治五郎は開校式で講演し、揮毫（きごう）した教育理念「精力善用」と「自他共栄」の額が今も講堂に掲げられている。これが校是となり、必修科目の柔道などのス

ポーツと文武両道を歩む灘中学校・灘高校は、全国で知られる進学校へとなっていった。治五郎について和田孫博校長は「未知なる課題を見つけて作り上げていく、自分や今居る場所と違うところと付き合っていく、これが本当のグローバル。（治五郎がのこした）戦前の言葉は色あせることなく、世界に通用する。それを生徒に伝えていくのが本校の使命」と語っている。

教育者としての地元における功績は灘校だけではない。明治中期、文部省参事官だった治五郎は、地域に教育を普及させたいと相談を受け、「御影教育義会」の設立を発案した。この組織には地元の有力者が会長に就き、学校や子どもたちの学びを支援した。１８９２（明治25）年には治五郎の助言でいち早く幼児教育の必要性をうたい、私立の幼稚園を開いた。現在、御影地域に幼稚園から高校までが密集して立地し、文教エリアを形成しているルーツにも治五郎の足跡を見ることができる。

御影では今、治五郎を改めて顕彰しようという動きが活発になっている。２０１７年に耐震改修工事を終えた御影公会堂に、柔道着姿の銅像や直筆の書など約50点を集めた展示コーナーが設けられた。２０１８年12月には生家からほど近い親戚筋の菊正宗酒造の敷地内に生誕地を示す石碑が建立された。

柔道を通して世の中に貢献する道を説き、人材を育てた治五郎。そのレガシーとも言える東京五輪が再びやってくる。（年齢は数え）

1860（万延元）年	現在の神戸市東灘区に生まれる
1870（明治３）年	父治郎作と上京する
1874（明治７）年	官立外国語学校に入学
1875（明治８）年	官立開成学校に入学
1877（明治１）年	柔術道場に入門
1881（明治14）年	東京大学（開成学校から改称）を卒業
1882（明治15）年	永昌寺に講道館を創設
1886（明治19）年	学習院教授兼教頭となる
1891（明治24）年	竹添須磨子と結婚
1893（明治26）年	東京高等師範学校の校長に就任
1909（明治42）年	アジア初のIOC委員就任
1912（大正元）年	第５回オリンピックに団長として参加
1922（大正11）年	講道館文化会創立、貴族院議員就任
1928（昭和３）年	灘中学校の開校式に参列
1936（昭和11）年	オリンピック東京開催（1940年）決定
1938（昭和13）年	カイロのIOC総会の帰路、船上で逝去 日本がオリンピック開催権返上
1964（昭和39）年	オリンピック東京大会が開かれる

【参考文献】
・「嘉納治五郎」（嘉納先生伝記編纂会　講道館）
・「気概と行動の教育者　嘉納治五郎」（生誕１５０周年記念出版委員会編　筑波大学出版会）
・「御影が生んだ偉人　嘉納治五郎（増補版）」（道谷卓著　神戸市立御影小学校創立１１０周年記念事業実行委員会）
・「嘉納治五郎　グローバル人材のロールモデル（灘中学校・灘高等学校教育研究紀要より）」（和田孫博校長著　灘育英会）

嘉納治五郎が創立に関わった灘中学校・灘高校＝神戸市東灘区魚崎北町

灘中学校・灘高校に建立された嘉納治五郎像（朝倉文夫作）

御影公会堂にオープンした嘉納治五郎の展示コーナー＝神戸市東灘区御影石町

嘉納治五郎の生誕地を示す石碑＝神戸市東灘区御影本町